

## エッセイストクラブ受賞の記

ご紹介にあずかりました尾崎俊介と申します。本日は日本エッセイストクラブ賞という伝統ある大きな賞をいただき、身に余る光栄と思っております。会長の村尾清一先生をはじめ、選考委員の先生方、そしてエッセイストクラブの皆さまにまず御礼申し上げます。

拙著は、私の大学時代の恩師のお一人であります明治大学の須山静夫先生のご生涯を綴った評伝と言えるかと思えます。

須山先生は、大恋愛の末に奥様とご結婚されたのですが、残念なことに、病魔によりその奥様を亡くされました。壮絶な闘病生活は二年近くに及び、そして奥様を亡くされた時、須山先生は深い絶望の淵に蹴落とされることとなった。

それでもその絶望から須山先生が何とか這い上がる事が出来たのは、奥様との間に生まれた息子さん、隆志さんの存在のおかげでした。先生は、いわば隆志さんを育てるために、自暴自棄の生活から立ち直ろうとされた。

しかし、今度はその息子さんが二十歳の時に、自動車事故で落命するという痛ましい出来事が起こる。須山先生の後半生は、自己破壊的な衝動に身を任せたいという誘惑と、なぜ最愛の二人が自分から奪われたのか、そのことについて納得の出来る理由を得るまでは死ねないという決意と、その二つの相対立するものの境をなす細い一本道を歩き通すことでありました。

私はそんな先生の生き方を、それこそ三十年近く傍観者として見つめてきたわけですが、一昨年夏、先生が急に、本当にふっと立ち消えるように急逝された時、先生の生涯の足跡、その生きた証は誰かが書き残すべきであるし、またそれは私がやるべき仕事であろうという思いに駆られました。そして先生が亡くなられてちょうど一週間経った時、何の準備もないまま、いきなり先生と初めて出会った日のことをブログに書き始めたんです。すると、そこから先はまるで堰を切ったように言葉が溢れてきて、わずか三十三日間でこの本を書き上げてしまった。毎日の執筆時間は一時間ほどでしたので、この本は実質三十三時間で書き上げたこととなります。その時の書くスピードたるや、自分が書いているのではなく、それこそ何かに憑りつかれたようでした。

ですから、この本を書くことに関してはさしたる苦労もなかったのですが、苦労したのはその先でした。私の書いた原稿を、どの出版社も引き受けてくれなかったんです。

冒頭に言いましたように、私の書いたものは、結局、須山先生に対する追悼記であるわけですが、出版社の編集者の方々によれば、追悼記というのは特定の個人についての極めて私的なコメントに過ぎないから、基本的に売れないと。特に書かれる対象となる人物か、その人物について書いている人が有名でない場合は売れない。だから商業出版は無理だと、そうおっしゃるのです。特に印象的だったのは、ある出版社の編集の方から『S先生のこと』ではなくて、もっと有名な先生、例えば『渡辺淳一先生のこと』だったら出版してあげてもいいよ』と言われたことで、出版の世界というのは厳しい世界であるなど、その時

改めて納得したのです。

しかしその一方、納得できない部分もあった。

最愛の奥様を亡くされ、最愛の息子さんをも亡くされた須山先生のご生涯は、確かに特殊なケースでありましょう。しかし、自分にとってかけがえのない存在である人を失うという経験は、それほど特殊なことでしょうか。病気や事故などで友人や恋人など、とにかく自分にとって極めて重要な人を失うことは、誰の身にも起こり得ます。実際、須山先生が亡くなった二〇一一年は東北の大震災の年でもあるわけで、あのこと一つをとっても、何万人、何十万人という人が、掛け替えのない人を失って泣いたはず。またそうした大災害がなくとも、例えばある程度長く生きていれば自分の親を亡くすということは誰の身にも起こるでしょう。

ですから、須山先生の身に起こった悲劇は、私的なものであるどころか、むしろ人間にとって普遍的なものと言っていいと、私は思います。

ところで、自分にとって大切な人を失った時、普通、人はどうするのでしょうか。

大抵は「忘れる」のだと思います。時間の経過に従って悲しみが少しずつ薄れるのをじっと待つ。勿論、「悲しみを忘れる」というのは一つの恵みです。忘却の恵みがなければ、人は悲しみに打ちひしがれたままになってしまいますから。

しかし、須山静夫という人は「悲しみを忘れる」という道を選ばなかった。奥様が亡くなった日、息子さんが亡くなったその日の悲しみを、その後数十年に亘って保ち続けるということを、自らの生き方として選択した。

その選択に、我々は驚愕し、そしてある種の感動を抱かないでしょうか。

ですから私は、須山先生の生涯の物語は、普遍的なテーマを持ち、かつ、驚きと感動に満ちたものだと思うのです。そのことが何故、出版社の編集者の方々には通じないのか。

しかし、原稿を書き上げてから一年以上経って、ようやく新宿書房の村山恒夫さんが私の送った原稿を読み、「この原稿、うちが引き受ける」と言って下さった。そして出版が決まってからは、新宿書房のスタッフの皆さんが全力を挙げてサポートして下さいましたし、また杉山さゆりさんという卓越したデザイナーが拙著に素晴らしい装丁を施して下さいました。

つまり村山さんたちは、須山静夫先生の生涯のドラマに、私と同様、驚きかつ感動して下さい、まだ海のものとも山のものとも分からないこの本の価値に賭けてくれたわけです。そのことに私は、深い敬意と感謝の念を抱いています。

また「賭ける」ということと言うならば、村山清一先生をはじめ、日本エッセイストクラブの皆さまもまた、須山静夫という人が選んだ生き方に深く共感し、やはりこの本に賭けて下さったのだと思います。そしてそのことの御恩を私は、この先一生忘れないでしょう。そして、今日の日のこの喜びもまた、私は一生、忘れないでしょう。

皆さん、どうもありがとうございました。